18世紀フランス社会と作者
――『美女と野獣』とヴィルヌーヴ夫人

藤原真実

忘れられた原著者

今日の日本で『美女と野獣』*La Belle et la Bête*という題名を知らない人はほとんどいない。だがその作者を知る人は少ないだろう。最初の『美女と野獣』は、口承文芸として自然発生的に生まれたのでも、ディズニーによって創作されたのでもない。18世紀のフランスで、作家ヴィルヌーヴ夫人によって書かれた文学作品である。このことは、日本ではもちろん、本国フランスでもまだよく知られていない。そもそも文学作品という認識がないせいか、ヴィルヌーヴ夫人の名も、『美女と野獣』というタイトルも、フランス語および日本語によるフランス文学史の本に記載されたためしはない。これまで見過ごされてきたことだが、よくよく考えると不可思議である。他の場所[1]でも指摘したように、ヴィルヌーヴ夫人によるオリジナル版『美女と野獣』は、古典古代からフランス17世紀にかけての文学伝統を継承し、多数の文学作品との対話のなかから誕生したすぐれて文学的な作品であり、後世の文学にも重要な影響を与えてきた。しかるに、作者を持たないことを特質とする民話のように扱われ、原著者の存在は長い間忘れられてきたのである。

その理由として、ヴィルヌーヴ夫人が自らの名を残そうとしなかったことが第一に挙げられるだろう。17-18世紀の多くの著者たちと同様に、ヴィルヌーヴ夫人はその著作に署名しなかった。最初の小説『夫婦の鑑』*Le Phénix conjugal*（1734年）

---

[1] 藤原真実「怪物と阿呆――「美女と野獣」の生成に関する一考察」『人文学報』第391号（2007），p. 47-87；藤原真実「「恋愛地図」で読む『美女と野獣』――連作的読解の試み」『人文学報』第466号（2012），p. 1-39；Mami FUJIWARA, « Une lecture de *La Belle et la Bête* selon la Carte de Tendre », *Dix-Huitième Siècle*, Paris, 2014, n° 46, p. 539-559.

と『美女と野獣』を含む『アメリカ娘と洋上ものがたり』*La Jeune Américaine et les contes marins*（1740年）は無署名で刊行された。後述するように、書いてもいない『疥癬病みの狼』*Le loup galeux*〔sic〕の作者にされかかった1744年以降は頭文字のVを記すようになったが、ヴィルヌーヴという名前がタイトルページに記されたのは、初版では死後出版の１冊だけである[2]。

第２の理由は、『美女と野獣』が民話と共通の要素を含んでいることである。フランスで17世紀に誕生した文学的妖精物語は、昔話の語り方やモチーフを用いて多様なテーマを自由に表現する文学ジャンルであるために、民話と混同されがちであるが、書かれた文学作品の間テクスト性のなかで練り上げられた文学的な作品であることが多い。『美女と野獣』も同様であり、共通のモチーフを持つ民話は多数存在する。アールネ＝トンプソンのタイプインデックスでAT425Cに分類されているそれらの民話を遡れば、２世紀にアプレイウスが書いた『黄金のろば』所収の「プシュケーの物語」に行き着く。たしかに『美女と野獣』はそれらの文学作品に取材しているが、「美女と野獣」という題名を含む非常に多くの要素はヴィルヌーヴ夫人によって創出されたものである。

原著者が忘れられた第３の理由は、ルプランス・ド・ボーモン夫人によるダイジェスト版の成功である。オリジナル版の刊行から16年後の1756年、ルプランス・ド・ボーモン夫人は『美女と野獣』を子ども用に縮約して自身の教育読本『こどもマガジン』[3]に収録したが、この教育読本が大ベストセラーになり、ヨーロッパ中に普及し、ポーランド語、ロシア語、ギリシア語を含む多数の言語に翻訳された。初版のタイトルページには、著者名としてルプランス・ド・ボーモン夫人の名がはっきり印刷されている。その後印刷された版は、ボーモン夫人が亡くなる1780年までに47版、さらに1887年までに少なくとも130版を数えた。それ以降、ボーモン版は幾

---

[2] 以下に各作品初版の扉における書名と著者名の記載例を示す。*Le Phénix conjugal*（1734）; *La Jeune Amériquaine*〔*sic*〕*et les contes marins*. Par Madame de***（1740）; *Les Belles solitaires* par Madame de V. ...（1745）; *Le Beau-frère supposé* par Madame D. V...（1752）; *La Jardinière de Vincennes*, par Madame de V***（1753）; *Le Juge prévenu* par Madame de V***（1754）; *Le Temps et la patience* par feu Mad. de Villeneuve（1768）.

[3] Marie Leprince de Beaumont, *Magasin des enfants, ou Dialogue entre une sage gouvernante et plusieurs de ses élèves*〔...〕. Londres, 1756.

度も翻案され、民間説話の中にまで浸透して普及した。こうしてボーモン版の爆発的な普及はヴィルヌーヴ版の存在をかき消し、署名をしなかったヴィルヌーヴ夫人の名を抹殺してしまったのである。

とはいえヴィルヌーヴ夫人は『美女と野獣』以外にも多数の作品を著して同時代の読者を獲得した重要な作家である。とりわけその小説『ヴァンセンヌの女庭師』[4]は18世紀に何度も再版され、19世紀はじめには同名のヴォードヴィル劇に翻案されてもいる[5]。しかしヴィルヌーヴ版『美女と野獣』は、1765年の物語集[6]と1786年の『妖精の小部屋』叢書第26巻[7]のなかで再版されたのを最後に、20世紀の末[8]まで、２世紀以上もの間ほぼ完全に忘れられてきた。影響力の大きな著作の作者であるにもかかわらず、ヴィルヌーヴ夫人はなぜこれほどまでに軽視され、忘れ去られてきたのか。ジャンルに固有の問題やボーモン版が普及したこと以外にも理由があるのではないか。本稿はこの疑問に答えるべく、これまで日本では知られてこなかったヴィルヌーヴ夫人の伝記的側面に光を当てることをとおして、18世紀フランス社会における作者の問題を考察する。

伝記的資料

ヴィルヌーヴ夫人の手紙や自伝的な文書は今日に伝えられていない。伝記的資料として残されているのは、ヴォルテール、グラフィニ夫人、ヴォワズノン、カザノヴァ、メルシエなど直接・間接にヴィルヌーヴ夫人を知っていたと思われる同時代人の書簡等のほか、ラ･ポルト神父の『フランス女流文学史』(1769)、グリムの『文

---

4 *La Jardinière de Vincennes,* Londres ; Paris : Hochereau l'aîné, 1753.

5 Antoine Jean-Baptiste Simonnin, *La Jardinière de Vincennes*, mélodrame-vaudeville en trois actes, représenté pour la première fois, à Paris, sur le Théâtre des Jeunes-Artistes, le 14 mars 1807.

6 *Contes de Mme de Villeneuve*, La Haye ; Paris : Mérigot père, 1765, 5 tomes en 2 vol.

7 Madame de Villeneuve, *La Belle et la Bête,* dans *Le cabinet des fées ; ou Collection choisie des contes des fées et autres contes merveilleux*, éd. Charles-Joseph Mayer et Charles-Georges-Thomas Garnier, Amsterdam et Genève, t. 26, 1786.

8 Madame de Villeneuve, *La Belle et la Bête,* suivi d'une *Lettre de la Belle à la Bête et d'une Réponse de la Bête à la Belle*. Édition établie par Jacques Cotin et Élisabeth Lemirre, Gallimard, 1996.

芸通信』（1747-1793）、『万国小説文庫』（1775-1789）といった同時代の批評的著作、さらに後代に書かれたミショーの『世界人名事典』（1811-1862）や『19世紀ラルース百科事典』のような事典類のなかの記述である。後述するように、同時代人の証言は、パリのクレビヨン宅で家政婦として暮らすヴィルヌーヴ夫人について書かれたもので、侮蔑や皮肉が込められているものがほとんどである。また後代の事典類の記述はいずれも断片的で、信頼性に欠けるところも多い。そうしたなかで、ヴィルヌーヴ夫人をはじめて本格的に研究したのが、アメリカ人研究者クーパーである。1976年にアメリカ、ジョージア大学に提出されたその博士論文『ヴィルヌーヴ夫人とその文学的遺産』[9]は、今日まで印刷されていないため、参照されることが比較的少ないが、とりわけヴィルヌーヴ夫人がクレビヨンと同居するようになって以降の後半生について、重要な発見を含んでいる。またヴィルヌーヴ夫人の生涯の前半については、スヴィデルスキがパリ、サン＝シュルピス小教区の洗礼証明書をはじめとする古文書を徹底的に調べ、先行する資料にない事実を明らかにし、クーパーの論文をはじめ多くの資料に散見する年代的な誤りを正している[10]。さらに、ヴィルヌーヴ夫人とボーモン夫人の著作の初の校訂版を出したビアンカルディは、ヴィルヌーヴ夫人のパリ時代、特にキノー嬢のサロンとの関係について詳しい調査を行っている[11]。以下では主にこれら３研究者の論考を足がかりとして、筆者自身も同時代や19世紀以降の資料に直接当たることにより、ヴィルヌーヴ夫人の生涯を跡づけてゆく。

プロテスタントの名家

スヴィデルスキが確認したパリ、サン＝シュルピス小教区の洗礼証明書によれば、ヴィルヌーヴ夫人ことガブリエル＝シュザンヌ・バルボは、父ジャン・バルボ

---

[9] Barbara Rosmarie Latotzky Cooper, *Madame de Villeneuve: the author of « La Belle et la Bête » and her literary legacy*, Ph.D.diss., University of Georgia, Athens, Georgia, 1976.

[10] Marie-Laure Girou Swiderski, « Madame de Villeneuve, la méconnue », in Roland Bonnel, Catherine Rubinger éd., *Femmes savantes et femmes d'esprit. Women Intellectuals of the French Eighteenth Century*, Peter Lang, 1997.

[11] Élisa Biancardi, « Notice bio-bibliographique », *La Jeune Américaine et les contes marins, Les Belles solitaires ;* Madame Leprince de Beaumont, *Magasin des enfants*. Édition critique établie par Élisa Biancardi, Honoré Champion, 2008.

（Jean Barbot）と母シュザンヌ・アレール（Suzanne Alaire）の子として、1685年11月28日にパリで生まれた[12]。バルボ家はプロテスタントの牙城ラ・ロシェルの由緒ある家柄である。ガブリエル＝シュザンヌの誕生日はナントの勅令が廃止された一カ月後であるから、一家が大きな動揺のなかにあったことが想像される。母親はまだプロテスタントを告白していたが、ガブリエル＝シュザンヌがカトリックの洗礼を受けていることから、パリ高等法院の弁護士だった父ジャン・バルボはその時すでに棄教していたと考えられている。ジャン・バルボはさらに、1692年にはセネシャル、国王評定官、1695年にはラ・ロシェル下級裁判所の名誉裁判官などを務めている。この時期に貴族の身分を取得し、ロマニエ、モッテなどの領地を所有していることから、相当な才覚をもって資力と地位を獲得していたことがわかる。さらにその父親、すなわちヴィルヌーヴ夫人の祖父に当たるアモス・バルボ（Amos Barbot：1566-1625）は、高名なプロテスタントで、ラ・ロシェルの名士であった。同市の地方上級法廷の弁護士のほか、国王評定官、オニス（Aunis）の大領地の国王代官を務め、1601年、1605年、1611年にはラ・ロシェルの代表として改革派政治会議に出席している。また1610年にはきょうだいジャン・バルボとともにラ・ロシェル市長に選出された。アーグ兄弟は「これほど多くの栄誉は、彼がラ・ロシェル市民からどれほど高く評価されていたかを物語っている」と書いている[13]。アモス・バルボはまた、同市の歴史を書いた最初の歴史家の一人でもある。写本のまま王立図書館に保管されていた同書は、19世紀末に３巻本で刊行されている[14]。

その親類とみられる[15]ジャン・バルボ（Jean Barbot：1655-1712？）は17世紀の代表的な旅行家で、やはりプロテスタントであったため、ナントの勅令廃止を機に

---

[12] 『19世紀ラルース』やミショーはそれより10年後の生年を推定しているが、スヴィデルスキの調査により誤りであることが判明した。しかしフランス国立図書館の総カタログ（BnF Catalogue général）でも、グラントの『フランス文学事典』（Cardinal Georges Grente dir., *Dictionnaire des lettres françaises*, Le XVIIIe siècle, Fayard, « Pochethèque », 1996（1951））でもこの誤りが踏襲されている。

[13] Eugène et Émile Haag, *La France protestante, ou Vies des protestants* […], Slatkin reprints, 1996, tome 1, p. 239.

[14] Amos Barbot, *Histoire de La Rochelle*, publiée par M. Denys d'Aussy, Paris, A. Picard, 1886-1890, 3 vol.

[15] Eugène et, Emile Haag, *op.cit.*, t. IV, p. 240.

そのきょうだいジャック・バルボと同名の甥ジャック・バルボとともに渡英し、アフリカ貿易に従事したあと、1678年から1682年の間に二度にわたりアフリカに遠征した。その後1688年に『西アフリカ沿岸地方の地誌』をフランス語で書き上げたが、版元を見つけることができず、自ら英訳版を作成した[16]。この版はジャン・バルボの死から10年後の1732年にロンドンで出版されている[17]。同書はジャン・バルボ自身が二度の旅行から持ち帰った記録のほかに、オランダ人旅行家オルフェルト・ダッペルの『アフリカ地誌』(1688) から多くを引用しているが、ダッペルの地誌と同様に、当時の知識人がアフリカを知る上できわめて有益な情報源となった。ジャン・バルボがアフリカ旅行を終えた後も、そのきょうだいジャック・バルボと同名の甥は、上乗りとして商船に乗り込み、ギニアやアンゴラへの旅行を繰り返し、『世界旅行記叢書』に多数の報告を残した。同書第六章には次のような記述が見られる。

> バルボはフランス出身者であるが、その名は英国人旅行家の間で卓越した位置を占めている。宗教紛争のために渡英した二人のきょうだいジャン・バルボとジャック・バルボは、その地で交易の才覚を発揮して相当な成功を手にした。ジャックの息子でジャンの甥であるジャック・ジュニアは、青年期に達するとすぐに、二人の親類が示した手本に目を開き、同じ手段で栄誉と富を手に入れることを目指した。彼は上乗りとしてドン・カルロス・オヴ・ロンドン号に乗船した。彼の同僚ジャン・カズヌーヴは同じ船の下士官であった。彼らが帰還すると、伯父のジャンは彼らの日記の整理を引き受け、それを自らの旅行記の中で発表した。この報告は、コンゴへの航海を行った英国船に関する唯一のものであるばかりでなく、アフリカでの貿易や航海に関する無数の有用な考察を含んでいる。著者は英語で書きながらもフランス語の発音から脱却できなかったように見えるが、本書ではバルボが用いた綴り字をそのまま採用した。アフ

---

[16] Robin Law, “Jean Barbot as a source for the slave coast of West Africa”, in *History in Africa,* 9 (1982), p. 155.

[17] Jean Barbot, *A Description of the Coasts of North and South-Guinea ; and of the Ethiopia inferior, vulgarly Angola : being a New and Accurate Account of the Western Maritime Countries in Six Books*, London, 1732.

リカの諸名称を確かめるのに他の方法がないからである[18]。

以上のことが示すように、ヴィルヌーヴ夫人の父方の家系であるバルボ家の人々は、それぞれに数奇な運命を辿ったが、そのことは彼女が歩むことになった人生と深く結びつくように思われる。プロテスタントの家系に生まれたこと、それもプロテスタントの牙城ラ・ロシェルでプロテスタントの擁護者として活躍したアモス・バルボの子孫であることは、複数の親類が亡命を余儀なくされたことからもわかるように、ナント勅令廃止以降のフランス王国で生きることを困難にしたであろう。その一方で、司法、政治、商業、冒険において目覚ましい活躍を遂げ、歴史書や旅行記などの重要な記録を残した第一級の知識人を輩出したバルボ家に生まれ育ったことは、ヴィルヌーヴ夫人がその後半生を文筆に捧げたことに関係づけられるだろう。さらに、名高い旅行家を親族にもったことは、彼らの情報を通して未開の大陸や海外との交易を現実感を持って描くことを可能にしたと考えられる。オリジナル版『美女と野獣』の枠物語である『アメリカ娘と洋上ものがたり』[19]は、フランスからアメリカへ向かう船上で乗客たちが退屈しのぎにお伽噺を語りあうという設定であり、小説『偽義兄』*Le Beaufrère supposé*（1753）の冒頭は、ラ・ロシェルからミシシッピへ荷物や入植者たちを運ぶ船の出奔の様子を、さまざまな出自の乗船者らの心理をも含めて克明に描いている。そうしたことは、ヴィルヌーヴ夫人が伯父たちの航海に思いを馳せ、あるいはその旅行記等に着想を得ていたことに関係すると考えられる。

もう一つ、亡命した親族とヴィルヌーヴ夫人の著作のつながりを示唆するように思われることがある。それは『アメリカ娘と洋上ものがたり』の主人公とその父親が名乗るドリアンクールDoriancourtという珍しい名前が、旅行家ジャン・バ

---

[18] Abbé Prévost, Rousselot de Surgy, Jacques Philibert, *Histoire générale des voyages, ou nouvelle collection de toutes les relations de voyages par mer et par terre, qui ont été publiées jusqu'à présent dans les différentes langues de toutes les Nations connues : [...]*, La Haye, 1758, t. 6, p. 211. 同書の第一巻から第六巻の編集にはアベ・プレヴォーが翻訳者として参加している。

[19] *La jeune Américaine et les contes marins*. La Haye, Aux dépens de la Compagnie, 1740–1741, 2 tomes en 1 vol.

ルボの妻となった女性の旧姓ドルランクールCharlotte-Suzanne Drelincourt[20]とよく似ていることである。アーグ兄弟によれば、この女性は1690年にロンドンでジャン・バルボと結婚している[21]。ドルランクールといえば、17世紀フランス・プロテスタントの高名な牧師で著述家のシャルル・ドルランクール（Charles Drelincourt, 1595-1669）がいるが、シャルロット＝シュザンヌはその６番目の息子ピエール・ドルランクールの娘である。シャルル・ドルランクールにはピエールをいれて18人の子どもがいた[22]。そのうち４人は牧師に、１人は高名な医師となり、彼らのほとんどがプロテスタント迫害から逃れてオランダ、スイス、イギリスで活躍している。彼らの父シャルル・ドルランクールは終生フランスにとどまったが、夥しい数の信仰書や論争書を残した[23]。ピエール・ベールは『歴史批評事典』のドルランクールの項のなかで、「この人が多産な筆で教会にどれだけ役立ったかは筆紙に尽くしがたい」と述べ、気骨のある清廉の人柄が敵対するカトリック陣営の人々からも尊敬され慕われていたことを伝えている[24]。こうしてみてゆくと、生きた世界は異なるとはいえ、シャルル・ドルランクールとその子孫たちの生き方は、アモス・バルボとその子孫たちのそれと多くの点で重なっている。プロテスタント迫害の時代を生き抜き、あるいは棄教を余儀なくされ、あるいは国を捨てても信念を貫いた二つの家族は、ジャン・バルボとシャルロット＝シュザンヌ・ドルランクールの結婚によって一つに結ばれることになる。ヴィルヌーヴ夫人が「アメリカ娘」に与えたドリアンクールという名前には、そのような家族に遠く馳せる思いが込められていたのではないだろうか。憶測の域を出ない部分もあるが、ヴィルヌーヴ夫人の出自を調べてゆくと、作家自身とその家族が辿った運命が彼女の作品のなかにちりばめられ、刻みつけられているのが見えてくるのである。

---

[20] この女性がジャン・バルボの結婚相手だったことはクーパーも指摘しており、ヴィルヌーヴ夫人のもう一つの小説*Le Juge prévenu*のなかに英国およびフランスから英国への移住の話が出てくることに関係づけている。Cooper, *op.cit.*, p. 9.

[21] Eugène et Émile Haag, *op.cit.*, t. 4, p. 317.

[22] ピエール・ベール『歴史批評事典Ⅰ』野沢協訳，法政大学出版局，1982年，p. 913.

[23] Eugène et Émile Haag, *op.cit.*, t. 4, p. 317.

[24] *Ibid.*, p. 913-914.

逆境

親族が亡命していることからわかるように、宗教的不寛容がはびこる17-18世紀フランスにおいて、バルボ家のようなプロテスタント系の知的エリートが生きるのは容易ではなかった。にもかかわらず父ジャン・バルボは社会的に成功し、地位と財産を築き、貴族の身分を取得してもいる。そのように有能な父親のもとで、ガブリエル＝シュザンヌは３人の姉妹とともに知的にも経済的にも恵まれて育ち、将来についても好条件の縁組みを期待できたと想像される。ところがガブリエル＝シュザンヌが16歳の1702年８月に父ジャン･バルボが亡くなり、彼女の境遇は一変する。父の死の直後に、ガブリエル＝シュザンヌを含む姉妹たちは、財産を実の母親に奪われることになるのである。スヴィデルスキによれば、未亡人となった母シュザンヌ・アレールが夫の遺産相続[25]に異議を申し立て、自身に対する夫の負債を娘たちが引き受けるという判決を取り付けた。そのため娘たちは彼女に50,433リーヴルという大金を支払わねばならず、ロマニエ、レ・モテなどの土地や領地を放棄することを余儀なくされた[26]。このほかにも、伯父アンリ･アレールへの借金返済を母親が引き受ける代わりに、娘たちは父親から与えられた850リーヴルの年金を放棄して母親に譲渡しなければならなかったという。

父親の死によって生じたそうした金銭問題の衝撃が、『美女と野獣』の作者の人生観に大きな影を落としたことは想像に難くない。オリジナル版『美女と野獣』は、富裕な商人であった父親が突然の火災で家と財産を失い、嵐か海賊のせいですべての商船が消失するところから始まるが、その状況は作者の実人生を反映しているように思われる。

> ところが、予期していなかった不運が、幸せな生活に混乱をもたらしにやってきました。屋敷が火事になったのです。屋敷中にあふれていた豪華な家具、物語の本、紙幣、金、銀、高価な商品のすべて、要するに商人の全財産がこの不吉な炎に呑み込まれ、それは激しく燃えさかったので、ほとんど何も運び出せませんでした。

---

[25] 旧体制下のフランスでは、配偶者は相続権をもたなかった。cf. 松本薫子「婚姻法の再定位：フランス民法典の変遷から（１）」,『立命館法学』383号，2019年，p. 346.

[26] Swiderski, article cit., p. 102.

この最初の不幸は他の数々の不幸の前触れにすぎませんでした。それまで何をしても成功していた父親が、難船のためか海賊のためか、海に出していた幾艘もの船を全部失ったのです。取引先にはことごとく約束を破られ、異国に送った代理人たちにも裏切られました。その結果、商人はこの上なく豪奢な生活から突然恐ろしいほどの貧しさに落ちてしまったのです[27]。

商人の娘たちに言い寄っていた名門貴族の青年たちは見向きもしなくなり、それまでさんざん世話になった人々は手のひらを返したように商人を誹謗するようになる。――こうした突然の転落は、ヴィルヌーヴ夫人のほかの作品にもたびたび描かれる。たとえば『美女と野獣』とともに『アメリカ娘と洋上ものがたり』に収録された『ナイアスたち』*Les Naïades*では、善良すぎる王ボン・エ・ルボンBon et Rebonが残酷な親戚アンビシューにより突然国を追い出され、娘とともに路頭に迷う。『偽義兄』では、ボレリ伯爵家の息子になりすました毒薬使いの息子が結婚相手の一家の財産を奪い、その父親を死に追いやり、不幸のどん底に突き落とすのである。

ガブリエル＝シュザンヌはその後、1706年４月26日に、ジャン＝バティスト・ガアロン・ド・ヴィルヌーヴと結婚するが、この結婚が彼女の人生にさらなる影を落とすことになる。ヴィルヌーヴ家はバルボ家と同じく法服貴族であったが、ジャン＝バティストは４人きょうだいの末子、肩書きは歩兵隊の中佐（lieutenant-colonel d'Infanterie）であり、好条件の結婚相手ではなかった。そのうえ夫にはさまざまな問題があることが判明し、結婚はその年のうちに破綻する。ヴィルヌーヴ夫人が21歳の誕生日を目前にした10月29日、夫人と夫の財産分離が成立、判決に付された証言によれば、ガアロン・ド・ヴィルヌーヴ氏は「共同財産のほとんどを蕩尽」し、「結婚の前にも後にも複数の借金をし、賭け事、家政の失敗、不品行のため経済状態が非常に悪」かったという[28]。

財産上は夫と別れたあとも、ヴィルヌーヴ夫人と夫との生活は続いていたらしい。1708年２月13日に夫人は女児を出産したが、娘のその後の消息は不明である。

---

[27] ガブリエル＝シュザンヌ・ド・ヴィルヌーヴ著，藤原真実訳，『美女と野獣』白水社，2016年，p. 7.

[28] Swiderski, article cit., p. 103-104.

夫は1711年６月13日に死亡し、夫人は26歳で寡婦となる。それ以降の資料は財産をめぐる裁判沙汰に関するものばかりであることから、スヴィデルスキは、ヴィルヌーヴ夫人の小説『ヴァンセンヌの女庭師』のなかに実体験にもとづく記述を見出す可能性を示唆している[29]。主要登場人物の一人アストレル夫人は、現実のヴィルヌーヴ夫人がそうしたように浮気で浪費家の夫のために辛酸をなめ、財産を完全な破産から救うために奔走するのである。

> 愛人たちにさせられる法外な出費では破産するのにまだ足りないと思ったかのか、夫はその上さらに賭け事や饗宴にふけりました。〔中略〕
>
> そんなふしだらな振る舞いのせいで、夫はすぐに借金漬けになりました。大きな領地の数々を賃貸に出し、それらを清算して差し押さえ地獄に落ちないようにするために、私の財産の一部を差し出さねばなりませんでした 。その間も夫はまるで自堕落で、何もかもが滅茶苦茶になるのを止めようともしないのです。それでわたしはその歳で夫の財産の僅かな部分でも救うために自分の人生を訴訟や交渉に捧げねばなりませんでした〔後略〕[30]。

単なるフィクションにしては困窮の状況が具体的であり、多くの点でヴィルヌーヴ夫人の伝記的事実に重なっている。さらに、似たような状況は、『美女と野獣』のなかにも見ることができる。先の引用箇所で、「この最初の不幸は他の数々の不幸の前触れにすぎませんでした」と語り手は述べているが、それぞれの不幸は、妖精物語で語られるにはあまりにも現実的なものばかりである。商人が破産して２年後に、失ったはずの商船が港に着いたという知らせがあり、商人は遠い道のりを出かけて行くが、そのときのことは次のように語られている。

> 船が到着したのは事実ですが、商人は死んだと思っていた同業者たちによって奪われ、品物はすべて散逸してしまっていたのです。
>
> そのため商人は、自分のものであるはずのものを十全かつ平穏に占有するど

---

[29] Swiderski, article cit., p. 104.

[30] *La Jardinière de Vincennes*, éd.cit., t. IV, p. 35-36.

ころか、自らの権利を主張したために、ありとあらゆる言いがかりをつけられねばなりませんでした。そういうことも乗り越えはしましたが、10か月もの間苦労と出費を重ねたので、利益はありませんでした。債務者たちは返済不能となり、訴訟費用もほとんど戻ってこなかったのです。

妖精物語のためにこれだけの詳細を想像するのは不自然であり、そこにもヴィルヌーヴ夫人の実体験が紛れ込んでいるとみるのが自然である。現実のヴィルヌーヴ夫人の人生は、まさに次から次へと不幸に見舞われ、転落しながらもあらがい、失ったものを回復しようとする闘いの連続であったのだろう。そのような経験が小説や物語のあちこちに自然と滲出したと考えられる。

ヴィルヌーヴ夫人の奮闘は1728年頃まで続いたが、おそらく1715年に母親が死亡したことにより、夫人の生活はいくぶん豊かになった。スヴィデルスキが発掘した証書類によれば、その時点で夫人はラ・ロシェルに近いロマニエとレ・モテの領地を回復し、サン＝クサンドル小教区にあるレ・モテの館に居住していた。ところが同じ1715年４月には、同居していた伯母で寡婦のメアリー・ホワイトに領地の全権を委任している。そのときすでにヴィルヌーヴ夫人がパリでの生活を始めていたのかはわかっていない。1728年には、夫人が依然として所有していたロマニエの領地とレ・モテの館が、ヴィルヌーヴ夫人の一番下の妹エステル・シャルロット・バルボことデュポン夫人に対して差し押さえられ、ヴィルヌーヴ夫人の名前はデュポン夫妻の債権者リストに載っているという。これらの資料から、夫人が姉妹やその家族のために次第に財産を手放していったことがわかる。すでに1717年に一回、1721年に二回にわたり土地を切り売りし、かつて失った年金を回復しようとしていた。1721年の資料によれば、彼女が起こした請求訴訟は二度にわたり棄却されている。こうしたことから、ヴィルヌーヴ夫人はこの頃には再び窮乏状態に陥り、パリに出て文筆で生きることを目指すようになったと考えられている。夫人の処女作『夫婦の鑑』は1734年に刊行されている。だが、いつ頃パリにたどり着いたのか、それまでの間何をしていたのかは知られていない。ビアンカルディはこの間のヴィルヌーヴ夫人の行動について、次のように興味深い推察をしている。

彼女が思い巡らしたであろうさまざまなことのなかに、アメリカ旅行も入っていたのではないか、あるいはじっさいにそれを決行したのではないか。『アメリカ娘または洋上ものがたり』の枠物語が漂わせる現実感はこの仮説を示唆するように思われる。いずれにせよ、彼女はその知識を親類の探検家たちの旅行記の中から得たにちがいない[31]。

ヴィルヌーヴ夫人がアメリカに渡ったという記録は今のところ見つかっていないが、たしかに『アメリカ娘』の枠物語には海を渡る人々の船上での生活が生き生きと描かれている。同じようにアメリカへの航海を扱った作品としては、『偽義兄』がある。「しばらく前からルイジアナへの植民が始まっていた[32]。」という一文で始まるこの小説は、レジャンス期にラ・ロシェルからミシシッピに植民者を送る船を最初の舞台とする。興味深いのは、船長が港で乗船者たちを待っているところから物語が始まることである。また船長の港での過ごし方、乗船する植民者たちの身分、出奔する乗船者たちの心境の起伏などが現実味をもって詳しく書かれている。ほぼ同時代のアベ・プレヴォーの『マノン・レスコー』や『クリーヴランド』の登場人物たちもアメリカへ渡るが、航海の現実味はいっさい感じられないことを思うと、ビアンカルディの言うように、ヴィルヌーヴ夫人には実際に旅行の経験があったか、旅行記に親しんでいたことが想像されるのである。

パリでの生活

パリに移り住んでからのヴィルヌーヴ夫人の生活については、ヴォルテール、ヴォワズノン、カザノヴァ、メルシエなど直接・間接にヴィルヌーヴ夫人を知っていた同時代人の証言が断片的に残っているが、いつ頃、どのようなつてを頼ってパリにたどり着いたのかなど、詳しいことは知られていない。ただわかっているのは、家政婦（gouvernante）として劇作家クレビヨンの屋敷に住み込み、そこでクレビヨン家の家政を取り仕切り、クレビヨンの検閲の仕事を補佐するかたわら、自

---

[31] *La Jeune Américaine et les contes marins, Les Belles solitaires* ; Madame Leprince de Beaumont, *Magasin des enfants*. Édition critique établie par Élisa Biancardi, Honoré Champion, 2008, p. 31, note 6.

[32] Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, *Le Beau-frère supposé*, 1752, t. 1, p. 1.

らの著作活動を行い、1755年にその家で亡くなったということである。

18世紀前半のフランス演劇を代表する悲劇詩人クレビヨン（Prosper Jolyot de Crébillon, 1674-1762）は、1733年以来国王検閲人として書籍の検閲に従事し、1735年からは警察検閲人として演劇作品の原稿を点検する職務に就いていた。クレビヨンが日記や書簡を残していたら、ヴィルヌーヴ夫人について詳しいことがわかったであろうが、残念ながら、驚異的な記憶力をもっていたこの詩人は、頭の中で作品を書くことを好み、上演のために必要になるまで作品を紙に書かなかったと言われる[33]ほどであり、悲劇と一部の演説や書簡のほかに書かれた資料はほとんど残されていない。19世紀初めに書かれたブリケの『フランス女性作家歴史事典』には、「〔ヴィルヌーヴ夫人〕は多数の文学者と文通をしていた。なかでもかの有名なクレビヨンは彼女とかなり親しくしていた[34]」とあるが、ヴィルヌーヴ夫人の書簡も残されていないため、真偽のほどは定かではない。またグラントの『フランス文学事典』には、「最初にヴィルヌーヴ夫人の著作に目を留め、彼女を励まして友達になったのはクレビヨン・フィスの方である」との記述がある。クレビヨン・フィスは父親の大クレビヨンと同居していたから、実際にそのような経緯があったのかもしれない。いずれにしても、ヴィルヌーヴ夫人のパリ生活の始まりが、最初の作品『夫婦の鑑』が刊行された1734年前後のことだとすれば、大クレビヨンはすでに晩年にさしかかり、貧しさのなかで、ほとんど外出もせずに、拾ってきた犬や猫に囲まれて暮らしていた。そんなクレビヨンについて、ラ・ポルト神父は次のように述べている。

> 不幸な者はだれでも彼〔クレビヨン〕の心を動かす資格があった。動物たちでも、とりわけそれが苦しんでいる場合には、彼の憐憫の情を駆り立てたもの

---

[33] Abbé de La Porte, *Éloge historique de Crébillon*, in Prosper Jolyot de Crébillon, *Œuvres*, Paris, chez les Libraires associés, 1772, t. I, p. 38 ; Paul O. LeClerc, *Voltaire and Crébillon père : history of an enmity, Studies on Voltaire and the Eighteenth century*, The Voltaire Foundation, vol. 115, 1973, p. 27.

[34] Fortunée Bernier Briquet, *Dictionnaire historique, littéraire et bibliographique des Françaises, et des étrangères naturalisées en France, connues par leurs écrits, ou pjar la protection qu'elles ont accordée aux Gens de Lettres, depuis l'établissements de la Monarchie jusqu'à nos jours ; dédié au premier consul*, Paris, 1804, p. 337-338.

だ。そういう行動原理のせいで、彼の家は犬猫だらけだったが、その姿や障害の重さが彼の度が過ぎるほどの優しさを証明していた[35]。

ラポルト神父は別の場所でも「もとは短気で怒りっぽいところもあったが、じつに優しい人で、かわいそうだと思えば思うほど彼は目をかけた」と書いている。このように、晩年のクレビヨンが苦しんでいる者に門戸を開放していたとすれば、ヴィルヌーヴ夫人が身を寄せたのは大いに自然なことだったと考えられるのである。

さて、この時代のヴィルヌーヴ夫人に関して残っている証言には、意外にも、悪意や軽蔑の念が込められているものが多い。そのなかでも最も古い証言をヴォルテールの手紙から二箇所引用したい。一つは自身の『趣味の殿堂』の原稿について書かれた1733年のモンクリフ宛ての手紙である。

> それ〔『趣味の殿堂』の原稿〕は、クレビヨン氏の家政婦をしているあの老いぼれミューズに手渡されたとのことですが、その婆さんは原稿の包みをベルシーに渡してくれると言ったそうです。〔中略〕クレビヨン氏は私の『殿堂』を猫たちの餌にでもして、長いこと読まずに放っておくという話です[36]。

ヴォルテールは自らの原稿の行く末を心配して、モンクリフにクレビヨンへの口利きを求めているのである。この手紙でヴィルヌーヴ夫人は名指されることはなく、軽蔑を込めて「老いぼれミューズ（une vieille muse）」「家政婦（la gouvernante）」「その婆さん（cette vieille）」と呼ばれている。この時代の家政婦とは、男やもめや独身男性の身の回りの世話をする女性（アカデミー辞典1762年版）を言うことが多いが、今日の一般的な「家政婦」（femme de ménage）とは異なり、同居して内縁関係をもつ場合が少なくなかった。在俗の神父であったアベ・プレヴォーにもそのような女性がいたことはよく知られている。つまり当時の

---

[35] Abbé de La Porte, *op.cit.*, p. 47.

[36] Voltaire, *Correspondance,* éd. Théodore Besterman, Gallimard, Bibliothèque de La Pléiade, 1964, t. I, p. 414.

社会で家政婦（gouvernante）というとき、そこには男やもめの夜のお相手といった、はっきり口に出して言えない職務が含意されていた。「家政婦とは、この時代の人々が大好きな侮辱的なあらゆる当てこすりを包み隠す遠回しな表現だった」[37]とスヴィデルスキが指摘するように、「家政婦」という名辞自体が軽蔑的な意味合いを含んでいたのである。したがって、夫人の名を名指すこともせずに、「老いぼれミューズ」「家政婦」「婆さん」という表現を並べるところに、ヴォルテールの侮蔑を見るべきであろう。それから17年後の1750年１月６日、やはり書き上げたばかりの作品を検閲に付そうとしていたヴォルテールは、警察代理官ニコラ＝ルネ・ベリエに宛てて次のように書いている。

> 悲劇『オレスティア』を書き上げました。クレビヨン氏の『エレクトラ』と同じ主題です。あなたからこの作品の出版許可をエノー長官に提出して、ダルジャンソン氏にその話をしていただくよう、お願いしたく思っておりました。あのヴィルヌーヴなる意地悪婆と彼女の犬たちのせいで原稿が被るかもしれない災難を回避するためです[38]。

ここではヴィルヌーヴという名前こそ挙がってはいるが、「あの意地悪婆」（cette vieille mégère）という表現にはいっそうの侮蔑と嫌悪が込められている。いったいなぜヴォルテールはそのような感情をヴィルヌーヴ夫人に対して持つようになったのか。

クレビヨンとヴォルテールの確執

この疑問を解くためには、ともに悲劇作家として活躍したクレビヨンとヴォルテールの間にあった確執[39]のことを想起する必要がある。ヴォルテールが国王、聖職者、貴族、哲学者、作家、版元など、さまざまな階層の人々を相手に不和や対立を繰り返したことは知られているが、なかでもクレビヨンとの反目は異様なほど根

---

[37] Swiderski, article cit., p. 106.

[38] Voltaire, *Correspondance*, *éd.cit.*, t. III, p. 151.

[39] これについては、主に以下２点の文献を参考にする。Paul O. LeClerc, *op.cit* ; Maurice Dutrait, *Étude sur la vie et le théâtre de Crébillon*, 1674-1762, Bordeaux, 1895.

深く、執拗に続いた。その原因の一つと考えられているのは、検閲人であるクレビヨンがヴォルテールの悲劇『マホメット』[40]の認可を二度にわたり拒否したことである。預言者マホメットを権力に飢えた偽りの狂信者として描くこの劇は、イスラム教と異国趣味の仮面の下にあらゆる狂信の危険性を暴き出し、「狂信というものが偽善者によって導かれた弱々しい魂をどれほどおぞましい非道行為へと向かわせるか」を示すものであった。ヴォルテール自身が述べているように[41]、実際の攻撃対象はカトリック教会の狂信であるから、パリでの上演には相当の困難が予想された。ルクレールによると、1740年１月にはコメディー・フランセーズの俳優たちが『マホメット』の公演を引き受けていたが、警察検閲人として選定されたクレビヨンはにべもなく認可を拒否した。その後、『マホメット』は1741年４月にリールで４回上演され、翌1742年８月にようやくパリで上演されたが、ヴォルテールの仇敵たちはすぐにこれを潰しにかかった。デフォンテーヌやピロンは作品の反カトリック的意図を糾弾し、パルルマンの検事総長ギヨーム・フランソワ・ジョリ・ド・フルリも動いたので、ヴォルテールは劇を取り下げざるを得なかった。しかしヴォルテールは諦めるどころか、1745年８月17日にはローマ法王ベネディクトゥス14世に『マホメット』を送り、法王自身によるお墨付きを取り付けている。さらに1751年秋、フリードリッヒ二世の宮廷にいたヴォルテールは、再び『マホメット』のパリ公演を試みる。アルジャンタルとヴォルテールの姪で愛人のドニ夫人が交渉役となり、原稿が警察に届けられ、再びクレビヨンが検閲人に指名された。しかしクレビヨンはまたしても認可を拒んだ。そこで、かねてより『マホメット』に関心を寄せていたリシュリューがダルジャンソンにほかの検閲人を選定するよう命じ、指名されたダランベールがあっさり認可を下した結果、悲劇は1751年９月30日にパリで上演されたのである。

このようにクレビヨンが二度にわたり『マホメット』の認可を拒否した理由については、批評家の意見は二つに分かれている[42]。第一は、ヴォルテールに対するクレ

---

[40] Voltaire, *Mahomet*, Tragédie en cinq actes, 1741.

[41]「私の芝居はマホメットの名の下に、ジャック・クレマンに短刀を握らせたドミニコ会の修道院長を描いている〔…〕。」（À M. César de Missy à Bruxelles, le 1er septembre 1742. Voltaire, *Correspondance*, *éd.cit.*, t. Ⅱ, p. 655.

[42] Paul O. LeClerc, *op.cit.*, p. 51.

ビヨンの敵意を理由とする見方である。たとえばボーマルシェはケール版『ヴォルテール全集』の『マホメット』の序文において、「1741年にクレビヨンは悲劇『マホメット』の認可を拒否したが、それはその芝居が禁止になると得をする人たちのことを好きだからでも、恐れているからでもない。ただ単に、『マホメット』は『アトレウス』[43]の敵だと聞かされたからだ」[44]と述べている。同様の見解はコンドルセによっても表明されている。「法王よりもきまじめなクレビヨンはぜったいにこの作品の上演を許可しようとしなかった。この作品は、興味を台無しにしたり、見るに堪えない残虐行為で顰蹙を買ったりしなくても、悲劇的な恐怖をその極みにまで高められることを証明することによって、クレビヨンがその創始者であり模範であると自負していたジャンルを諷刺したからである[45]。」以上の引用からわかるように、ボーマルシェもコンドルセもクレビヨンの認可拒否の理由として、クレビヨンのライバル心、さらにいえば、悲劇詩人としてクレビヨンを乗り越えてしまったヴォルテールに対する嫉妬や恨みがあったことを示唆している。

その一方で、認可を拒んだクレビヨンに嫉妬や悪意はなかったとする見方もある。『クレビヨンの生涯と演劇』の著者モーリス・デュトレはそのような観点からクレビヨンを弁護し、クレビヨンはカトリック教徒としての努めを誠実に果たしただけだと主張した。『マホメット』がパリで初めて演じられたとき、ヴォルテールの敵たちは「ラヴァイヤックやジャック・クレマンのような人々を養成するために書かれた非常に危険な作品[46]」だと言って攻撃したが、憤慨したのはヴォルテールの敵たちだけではなかった。「一般の観衆たちは、『マホメット』がイスラムの狂信を攻撃するという外観の下で、あらゆる宗教、とりわけカトリックに打撃を与えよ

---

[43] Prosper Jolyot de Crébillon, *Atrée et Thyeste*, tragédie en cinq actes et en vers, 1707.『アトレウスとテュエステス』は1707年にコメディー・フランセーズで初演されたクレビヨンの代表作である。

[44] « Avertissement des éditeurs de l'édition de Kehl », Voltaire, *Œuvres complètes*, Paris, Furne, 1835, tome I, p. 435. この直後にダランベールが『マホメット』の検閲を任じられて認可したことが言及されているから、1741年というのはボーマルシェの勘違いで、実際には1751年のことを書いていると思われる。

[45] Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat (1743-1794 ; marquis de), *Vie de Voltaire*, *Œuvres complètes*, Paris, 1804, t. 6, p. 65.

[46] « Avis de l'Éditeur », *Ibid*., p. 436.

うとしていることをすぐに見てとった[47]」というのである。そうした状況において、「反宗教的ではなかったクレビヨンがこの著作を断罪することにより自らの原理に対する忠誠を表し、フルーリ枢機卿やリールで観劇した聖職者たち以上に実際的感覚を示したのはいたって自然なこと[48]」だと指摘する。

> このうえなく温厚で物静かなクレビヨンはといえば、嫉妬など感じたためしはなく、いかなる種類の術策も軽蔑していたし、他人を攻撃する陰謀であれ、自分の役に立つ企てであれ、絶対にしなかったことは、ド・ラ・ポルト氏とともに誰もが異口同音に認めている。したがって、彼はヴォルテールの身に起きたあらゆるできごとに全く関与していなかったのだ[49]。

さらにデュトレが言及しているクレビヨンの同時代人ラ・ポルト神父のことばも引用しておく。

> 〔クレビヨン〕は諷刺を軽蔑していた。〔中略〕だから彼は誰に対する批判も書かなかった。誰もがそのことをよく知っていたので、アカデミーでの演説で彼がこの詩行――いかなる敵意もわたしの筆を毒したことはない[50]――を朗唱したとき、聴衆は何度も拍手を繰り返してクレビヨン氏が自らに与えた評価の正しさを是認した[51]。

このように、デュトレはクレビヨンを擁護し、ルクレールはヴォルテールに軍配を上げているが、両者がともに言及し、同時代人の多くが指摘しているのは、クレビヨンがヴォルテールの敵たちに利用されていたらしいということである。例えば

---

47 Dutrait, *op.cit.*, p. 69.

48 *Ibid.*, p. 71.

49 *Ibid.*, p. 83.

50 1731年９月27日、クレビヨンはアカデミー入会演説の全文を韻文で行った。これはその一行である。演説の全文については、以下を参照。Prosper Jolyot de Crébillon, « Remerciement », *Œuvres*, Paris, P. Didot l'Aîné, 1818, t. II, p. 339-348.

51 Abbé de La Porte, *op.cit.*, p. 41-42.

コンドルセは次のように証言している。

> 社交界のすべての人々と文人たちの大半がクレビヨンに味方するのを毎日のように耳にしてヴォルテールは辟易していた。そういう人たちは、これという意見があって味方しているというより、あらゆることに通暁するヴォルテールの才能を罰したかったのだ。一つのジャンルだけに限定された才能は一種のひらめきのようなもので、〔他人の〕自尊心を傷つけることが少ない分、大目に見られるものなのだ[52]。

同様の見解はマルモンテルによっても示されている。

> 〔ヴォルテールを宮廷から〕遠ざけるためなら、寵姫〔ポンパドゥール夫人〕を彼から引き離しさえすればよかった。そのために取られた方法は、彼〔ヴォルテール〕にクレビヨンを敵対させることだった[53]。

マルモンテルによれば、晩年のクレビヨンがマレー地区の片隅で貧しい暮らしをしていることを知らされたポンパドゥール夫人は、心を痛め、国王から100ルイの年金を取り付けたほか、クレビヨンの悲劇『カティリナ』の朗読会を企画し、この悲劇の公演（1748年）を後押しした。こうしてクレビヨンは再評価され、さらに1750年にはルーヴルの王立印刷所でクレビヨンの著作集を印刷するという恩恵を与えられる[54]。マルモンテルによれば、その頃すでにヴォルテールは冷遇されており、宮廷に行くこともなくなっていた。

さらに18世紀後期から19世紀のはじめにかけて文芸批評家として活動したジュリアン・ルイ・ジョフロワもこの確執の動因が二人の外側にあったこと、そしてそれが文学的と言うよりは政治的なものであったことを指摘している。ヴォルテールとクレビヨンの対照的な資質についても鮮やかに書いているので、少し長く訳出したい。

---

[52] Condorcet, *op.cit*, t. 6, p. 91.

[53] Jean-François Marmontel, *Mémoires*, *Œuvres*, t. 1, Paris, 1819 p. 132.

[54] *Œuvres de M. de Crébillon, de l'Académie Française*, Paris, de l'Imprimerie royale, 1750.

人々の大半はクレビヨンとヴォルテールを対立させて面白がっていた。文学は二つの徒党に分裂していた。この闘いの真の動機についてはいつも誤解されていたが、じつのところ、それは文学的というより政治的な闘いだった。この論争の中で皆が注視していたのは二人の作家でも二人の詩人でもない。二人の人間だったのだ。孤独で、少し人間嫌いでさえあり、物静かで、無頓着で、策略も野望もなく、演劇の世界だけに閉じこもっていたクレビヨンは、作家以外の何者でもなかった。ヴォルテールはといえば、満たされず、めらめらと情熱を燃やし、名声と評判を渇望し、虚栄の欲望に苛まれ、あらゆるジャンルの仕事をし、すべての著作のあちこちにきわめて大胆な警句や考察を書き散らしながら、革新者の到来を――世論を魅了し、あらゆる精神に君臨しようとする征服者の到来を宣言していた。ヴォルテールが成功すればそれが彼の思想の普及の強力な手段となるから、文学よりはるかに重要な事柄に関するこの詩人の考え方に不満だったあらゆる人々は、彼の栄誉を貶めるために、彼のライバルの栄誉を引き上げようと考えたのだ〔後略〕[55]

ヴォルテールがどこまでそのことを理解していたのかわからないが、クレビヨンが再評価され始める頃からヴォルテールは自らの才能とその優越性を誇示するべくクレビヨンが扱ったのと同じ題材で次々と悲劇を発表していった。1748年には『セミラミス』*Sémiramis*（クレビヨン、1717年）を、1750年には『エレクトラ』*Électre*（クレビヨン、1798年）を『オレステス』*Oreste*というタイトルで、1752年には『カティリナ』*Catilina*（クレビヨン、1748）を『救われたローマ』*Rome sauvée*として書き直した。「復讐」はクレビヨンの死後も続き、1772年には『アトレウス』*Atrée et Thyreste*（クレビヨン、1707）を『ペロプスの子孫たち、あるいはアトレウスとテュエステス』*Les Pélopides ou Atrée et Thyreste*に書き変えて発表した。もっとも、当時は複数の作家が同じテーマで詩や演劇を書くことは珍しいことではなかった。「系列的アプローチ」を提唱したシルヴァン・ムナンは、18世紀の詩および演劇作品の中に、作者たちが競って同じ一つのテーマについて書き、

[55] Julien-Louis Geoffroy, *Cours de littérature dramatique, ou Recueil par ordre de matières des feuilletons de Geoffroy*, Paris, 1819, t. 2, p. 235-236.

そうして生まれた作品を読者の審判に委ねるものが多くあったことを指摘している[56]。しかし、そのことを考慮してもなお、ヴォルテールの執念深さは際立っていると言えるだろう。

「老いぼれミューズ」

なぜヴォルテールはヴィルヌーヴ夫人のことを悪し様に書いたのかという問題に戻るなら、クレビヨンとの確執に原因の一つがあったことは、ほぼ間違いないだろう。スヴィデルスキは、クレビヨンに向けられた敵意の影響をヴィルヌーヴ夫人が受けた可能性を指摘している[57]。要するに彼女は、女性であり「家政婦」であるという身分ゆえの差別に加えて、クレビヨンとヴォルテールの対立のとばっちりを受けたのである。確執の始まりを『マホメット』の認可の問題が起こった1740年以降と考える向きもあるが[58]、1733年のモンクリフ宛て書簡におけるヴォルテールの「老いぼれミューズ」「婆さん」といった軽蔑的な表現には、悲劇詩人としての先輩クレビヨンに対するヴォルテールの一方的な敵対心がすでに影響していたのかもしれない。なぜなら、ヴォルテールが用いる「老いぼれミューズ」なる表現は、1731年にアカデミー会員に選ばれたクレビヨンが韻文で行った入会演説を揶揄していると考えられるからである。そのなかでクレビヨンは、古代ギリシアの詩人のように、冒頭から何度も「ミューズよ」「わがミューズよ」と呼びかけている[59]。アカデミーの入会演説を韻文で行うことは当時としても異例であったが、そのなかでの「ミューズよ」「わがミューズよ」という呼びかけは聴衆に強い印象を与えたにちがいない。さらに、女性作家に対するヴォルテールの偏見を考慮に入れる必要があるかもしれない。後述するように、ヴィルヌーヴ夫人はクレビヨンの検閲の仕事を手伝い、意見を述べることもあったから、自らの著作の検閲に女性が関わることに対するヴォ

---

[56] Luc Fraisse, « Entretien avec Sylvain Menant », in Luc Fraisse dir., *Séries et variations. Études littéraires offertes à Sylvain Menant*, PUPS, 2010, p. 38-40.

[57] Swiderski, art. cir., p. 106-110.

[58] ルクレールはヴォルテールが1733年の『趣味の殿堂』の検閲人としてクレビヨンを好んだことからも、当時はクレビヨンに対して特別な感情はなかったとし、確執は1740年以降に始まったと指摘している。Paul O. LeClerc, *op.cit.*, p. 39.

[59] Prosper Jolyot de Crébillon, « Remerciement », *Œuvres*, Paris, P. Didot l'Aîné, 1818, t. II, p. 339-348.

ルテールの不満や苛立ちがあのような軽蔑的な表現に表れたとも考えられるだろう。

キノー嬢のサロンと『疥癬病みの狼』

クレビヨンとヴィルヌーヴ夫人を揶揄したのはヴォルテールだけではない。ヴォルテールが親しくしていた女優ジャンヌ＝フランソワーズ・キノー（Jeanne-Françoise Quinault, 1699-1783）とそのサロン（Société du bout de banc）の才気あふれる常連たち、すなわち『ペルー女の手紙』の著者グラフィニ夫人（Françoise de Graffigny, 1695-1758）、ケリュス伯爵（Anne Claude Philippe de Caylus, 1692-1765）、ヴォワズノン（Claude Henri de Fusée, abbé de Voisenon, 1708-1778）等もしばしばヴィルヌーヴ夫人とクレビヨンを物笑いの種にしていた[60]。1744年11月27日、グラフィニ夫人は親友ドゥヴォーに「アカデミーを非難する」と題する詩を送った。それはアカデミー会員に選出された人々の怠慢を揶揄する作者不詳の諷刺詩であったが、その最終詩節には次のように書かれている。

煙草飲みよ、いつまでもパイプをくわえてないで
はやく王さまのために、一行でも二行でも詩を作れ
クレール〔クレイオー〕がもったいをつけるなら
カルトゥジオ会士を墓穴から掘り起こせ[61]

「煙草飲み」（Fumeur）とは愛煙家だったクレビヨンのことで、アカデミー会員に選出された1731年前後から作品の発表が滞っていたことが揶揄されている。また「クレール」« Claire »とは、叙事詩を司るミューズ、クレイオー（Clio）を誤ってクレールと書いたものと考えられている。上に引用した手紙のなかでヴォルテールがヴィルヌーヴ夫人を「老いぼれミューズ」と呼んでいることと関係づけられる

[60] この問題については、エリーザ・ビアンカルディによる以下の解説に依拠しながら論じていく。Élisa Biancardi, « Notice », *La jeune Américaine et les contes marins* […], édition critique établie par Elisa Biancardi, Paris, H. Champion, 2008, p. 41-50.

[61] Madame de Graffigny, *Correspondance*, éd. J.A. Dainard et al., Oxford, Voltaire Foundation, 2000, t. VI, p. 68.

だろう。「カルトゥジオ会士」はといえば、クレビヨンの著作はじつはカルトジオ会修道士が書いたものだという噂[62]があったのを当てこすったものである。その修道士が当時すでに亡くなっていたため、ミューズが詩の着想を与えてくれないのなら、死んだ修道士を墓穴から「掘り起こ」しても作品を書けということであろう。それからひと月後の1744年12月８日にグラフィニ夫人は同じドゥヴォーに宛てて次のように書いている。

> クレビヨンのクレールは何を意味するのか、昨日もひとに聞いたのですが、誰も何も知りませんでした。あなたに言ったとおり、「疥癬病みの狼」の母親の洗礼名がクレールなのかもしれませんが、それもわかりません。世間での彼女の名前はヴィルヌーヴです[63]。

これを読んだドゥヴォーが「あなたが煙草飲みのクレール〔ミューズ〕だと思っているヴィルヌーヴ夫人とやらは彼の愛人のようですね」と言うと、グラフィニ夫人は愛人という表現を言い換えて「坊やの義母（la belle-mère du Petit）」すなわちクレビヨン・フィスの継母と書いている。これらの表現には、ヴィルヌーヴ夫人やクレビヨン・フィスに対するいわゆる「上から目線」の態度が読み取れるが、さらに「疥癬病みの狼」の母親という言葉には明白な悪意が込められている。これには1744年にライデンを出版地として出版された一冊の本――『疥癬病みの狼と年老いた娘』*Loup galeux*〔sic〕*et la Jeune-Vieille*が関係している。タイトルページに著者名として「V夫人」とあることから、人々はヴィルヌーヴ夫人の作品だと思い込んだが、実際にはケリュス伯爵とキノー嬢のサロン客たちがヴィルヌーヴ夫人を茶化す目的で創作したものである。当のヴィルヌーヴ夫人は翌1745年に『閑居する美女たち』[64]第３部の序文で『疥癬病みの狼』をはっきり否認している。ところがグラフィニ夫人はその少し前、1744年７月３日の手紙で、『疥癬病みの狼』について次のように語っていた。

---

[62] Cf. Abbé de La Porte, *Éloge historique de Crébillon*, *éd.cit.*, p. 44-45.

[63] Madame de Graffigny, *op.cit.*, p. 88.

[64] Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, *Les Belles solitaires*, Amsterdam（i.e. Paris）: P. Marteau, 1745.

『疥癬病みの狼』は或る貧しい夫人の著作です。その人はニコル〔キノー嬢〕に匿名で手紙を書いて、それを売ってほしいと頼んだのです。彼女はみんなに無理矢理それを買わせましたが、売れたのはたったの40部でした。残部をさばくため、彼女はブレーズ〔ケリュス伯爵〕か誰かに３つ目の物語を書かせてそれに付け加えるつもりです[65]。

つまり困窮したヴィルヌーヴ夫人が自著『疥癬病みの狼』の販売をキノー嬢に依頼し、キノー嬢は慈悲深くもそれに尽力しているというのである。さらに1745年３月２日朝の手紙では、それは「坊や」すなわちクレビヨンの息子を助けるためでもあったとグラフィニ夫人は書いている。クレビヨン・フィスはキノー嬢のサロンの常連であり、グラフィニ夫人とも親しかったが、同時に父親クレビヨンと同居してもいた。そのクレビヨン家が困窮していたのは事実であるから、この話は信憑性をもって伝えられたのだろう。グラフィニ夫人も当時はこの話を信じていたようだが、それから３年後にキノー嬢本人から、すべては彼女がサロンのメンバーと仕組んだ冗談だったことを知らされる。要するにヴィルヌーヴ夫人を物笑いの種にするために『疥癬病みの狼』を創作し、それをヴィルヌーヴ夫人の著作として売り出すことで、キノー嬢とその仲間たちは、貧しい「坊やの義母」に経済的支援をするというお涙頂戴劇を打ったのである[66]。グラフィニ夫人が手紙のなかでヴィルヌーヴ夫人を「「疥癬病みの狼」の母親」と呼んだ背景には、このようにたちの悪いミスティフィカシオンがあった。ビアンカルディが指摘しているように、キノー嬢たちは「疥癬病みの狼」というキャラクターの創作によって、ヴィルヌーヴ夫人自身と彼女が創作した異形の登場人物たち、すなわち『美女と野獣』のベット、そして『閑居する美女たち』の挿話『ミルリトン』に登場する瀕死の狼（ミルリトン）を揶揄

---

[65] Madame de Graffigny, *op.cit.*, t. V, p. 377.

[66] 周知のとおり、才気煥発なキノーは女優として活躍しただけでなく、ヴォルテール、ラ・ショセ、グラフィニ夫人などの文学者に作品のアイディアを提供していた。お涙頂戴劇Comédie larmoyatneの先駆けとなったラ・ショセの『当世風の偏見』（1734）やグラフィニ夫人のお涙頂戴劇『セニー』にもキノーの提案や助言が貢献した。Cf. Gustave Lanson, *Nivelle de La Chaussée et la comédie larmoyante*, 1887, p. 141 ; Judith Curtis, *"Divine Thalie": the career of Jeanne Quinault*, Oxford, Voltaire Foundation, 2007, chapter 9, p. 147-151.

したのである[67]。『美女と野獣』のベットは象の鼻のようなものと鱗を持つまさにおぞましい怪物であり、『ミルリトン』の狼は疥癬にかかってはいないが、「とても大きくて、とても痩せていて、がりがりだったので、残された毛は逆立ち、おそろしく泥にまみれていた[68]」と形容されている。ヴィルヌーヴ夫人は『閑居する美女たち』の序文で自分は『疥癬病みの狼』の作者ではないとはっきり否定した上で、次のように述べている。

> その作者がそれをわたしに贈った密かな理由には立ち入りませんが、わたしにその方のご親切をお断りする確固たる理由がなかったとしたら、謹んで、ただ沈黙することにより、それはわたしのものだと認めてしまったかもしれません。その確固たる理由とは、わたし自身が「狼の母親」と呼ばれたくないということです[69]。

「「狼の母親」と呼ばれたくない」ということは、実際にみずからがそう呼ばれているのを知っていたということであろう。グラフィニ夫人の1744年12月８日の手紙でも「「疥癬病みの狼」の母親」という表現が用いられている。ビアンカルディはこのヴィルヌーヴ夫人と「疥癬病みの狼の母親」の関係づけにはさらに意地悪な意図が隠されていること、「クレビヨンがその家に迎えて住まわせた貧乏でおそらく美しくはない物語作家と、人助けの好きな劇作家が親切にも街角で拾ってきては自分の家に入れてやった身寄りのない惨めで見苦しい動物たちとの類似性」が示されていることを指摘している[70]。そのように考えるなら、ミルリトンの物語のなかに、ヴィルヌーヴ夫人とクレビヨン、そして彼らを笑いものにする人々の人間関係を読み取ることもできる。『ミルリトン』の主人公アドレは、瀕死の見苦しい狼に嫌悪

---

[67] 『閑居する美女たち』は『疥癬病みの狼』の出版直後に刊行されたが、キノー嬢の取り巻きのなかには、印刷前の原稿を読んでいた者がいたようだ。ヴィルヌーヴ夫人自身も「私の偽出版者は印刷前の『閑居する美女たち』を偶然読んで、痩せてがりがりになって危険な森にたどり着くミルリトンから「疥癬病みの狼」の着想〔…〕を得たに違いありません」と述べている。*Ibid.*, p. 47.

[68] Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, *Les Belles solitaires*, *éd.cit.*, p. 825.

[69] *Ibid.*, p. 46-47.

[70] *Ibid.*, p. 45.

をもよおす腹心ヴィエイユ・モードに対してきっぱりと次のように言う。

> わたしたちが注意して見るべきなのは精神の善良さと魂の美しさであって、うわべの華やかさではありません。そんなものはごく僅かな不運で消し飛んでしまうものです。だからあらためて言いますが、わたしはこの哀れな動物に対して何の嫌悪も感じません。彼があんなにみじめな状態に陥ったのは、これまで空腹を堪え忍び、ここに辿り着くために苦痛を味わったからなのでしょう。そうだとすれば、当然わたしたちは彼にその埋め合わせをしてあげるべきなのです[71]。

アドレのことばを通して示される行動原理はヴィルヌーヴ夫人を庇護したクレビヨンのそれと同じであり、『美女と野獣』のベルが従おうと努めたものでもある。その一方で、ヴィルヌーヴ夫人やクレビヨンを嘲笑した人々は、見苦しいという理由だけで狼を忌み嫌い憎悪するヴィエイユ・モードに似ている。そして、逆境の果てにパリに辿り着きクレビヨンに救われたヴィルヌーヴ夫人は、ミルリトンそのものである。こうしてキノー嬢たちの言動に照らしてみると、ヴィルヌーヴ夫人とクレビヨンの結びつきのありようが、おぼろげながらではあるが、見えてくるのである。

詐欺と盗み

ここでキノー嬢のサロンの常連だったもう一人の人物、ヴォルテールと親しい関係にあった作家ヴォワズノン神父の証言を挙げたい。彼もわずかではあるが、ヴィルヌーヴ夫人に関する記述を残している。他界した同時代の文人らの人物伝をまとめた『文学裏話』のクレビヨンの項で、ヴォワズノンはクレビヨンの悲劇に一定の評価を与えた後で、その人物や私生活について次のように述べている。

> クレビヨンの精神には趣味も洗練もなかった。体つきはその才能と同じく力に満ちていたが、センスも色気もなかったので、自然が与えた美点も彼を不潔

[71] *Ibid.*, p. 825-826.

にすることにしか役立たなかった。彼が人生をともにしたのは二十匹の犬と、三十本のパイプと、ド・ヴィルヌーヴ夫人とかいう人だった。この女性は若かりし頃に彼を欺し、年老いると彼に盗みをはたらいた。ポンパドゥール夫人は内帑金から彼に二千リーヴルの年金を支給させた。彼は警察検閲人であり、アカデミー・フランセーズの会員でもあった。そこで彼はほとんどいつも居眠りをしていて、意見を言うときでも夢を見ているようであった[72]。

クレビヨンの人物もけなされているが、「この女性は若かりし頃に彼を欺し、年老いると彼に盗みをはたらいた」という証言には聞き捨てならないものがある。具体的な説明も根拠もなく、これ以外に同様の証言は残されていないため、信憑性は低いと思われる。家政婦として暮らしていた夫人は金銭の管理も任されていたから、そのような疑いを掛けられやすい位置にいたことはたしかだ。まったくの中傷だとすれば、社交界の「冗談」がここまで人を貶める力を持っていたということだろう。

悪玉妖精

ヴォルテールより半世紀近く後に生まれたルイ・セバスティアン・メルシエ（1740-1814）もクレビヨンとその「愛人」に関する証言を残している。早くから文学と演劇に情熱を燃やしていたメルシエは、19歳のときにクレビヨンを訪問したことを、次のように語っている。

彼［クレビヨン］に詩をいくつか朗唱してほしいと頼むと、もう一回パイプをふかしたらお望み通りにしましょうと言った。上背が4ピエ〔約130cm〕の女性がガニ股で入ってきた。私のそれまでの人生で見たことがないくらい、彼女の鼻はものすごく長く、その目はものすごく意地悪な光に燃えていた。その人が詩人の愛人だったのだ。犬たちがうやうやしく椅子を一つゆずると、そのひとは私の真向かいに座った。[...] 私の目に映った詩人はいたって人のいい、

[72] Claude Henri de Fusée, abbé de Voisenon, *Anecdotes littéraires, Œuvres complètes*, Paris, 1781, t. 4, p. 49-50.

うわのそらで、夢見がちで、寡黙な男だった。愛人の方は、目の中にある意地悪さがことばの端々にもあらわれていた。詩人は朗唱が終わるとパイプをふかしてばかりいたので私は愛人と話した。いったいどのあたりが彼女の脚なのだろうとしげしげ眺めながら[73]。

すでに指摘されているように、メルシエのこの証言には若干疑わしいところがある[74]。メルシエが19歳であれば1759年だが、ヴィルヌーヴ夫人は1755年に亡くなっているからである。スヴィデルスキが言うように、メルシエの記憶違いか、あるいはでっち上げか、あるいはヴィルヌーヴ夫人以外の家政婦がいたのかのいずれかであろう。クレビヨンは実際には猫も相当数飼っていたとされるが、それが言及されていない一方で犬の頭数が24（２ダース）、パイプが30本という数のきりの良さから、この文章には誇張や脚色がほどこされていることが推察される。さらに女性の容姿について、130センチという背丈、ガニ股、さらに鼻の長さと意地悪な目つきを強調するメルシエの筆致は、まるでおとぎ話の悪玉妖精を描いているかのように意地が悪い。そうしたことからも、メルシエのこの証言はあまり信用できない。仮にそれがヴィルヌーヴ夫人のことであるなら、一部の同時代人の彼女に対する見方がこの記述の中に反映されているのかもしれない。

家政婦の分際で

書かれた年代は前後するが、ヴィルヌーヴ夫人の著作について同時代人が書いた批評を挙げておきたい。メルヒオール・グリムの『文芸通信』1754年７月20日付の記事であるが、これもまた冷ややかで軽蔑的ともいえる内容である。

これまで大クレビヨン氏の家計のやりくりしかしてこなかったヴィルヌーヴ夫人とかいう女性――クレビヨン氏と同居して一種の執事をしている――は、ほかの大勢の人々のように作家になろうとして、昨年、『ヴァンセンヌの女庭師』と題する小説を全五巻で発表したが、まったく話題にもならなかった。そ

[73] Louis Sébastien Mercier, *Tableau de Paris*, éd. Jean-Claude Bonnet, Mercure de France, 1994, t. II, p. 801-802.

[74] Swiderski, article cité, p. 108.

> してつい最近、『偏見を持った裁判官』なる題名で新たに一冊の小説を出した。それは概要を示す価値もない、準備もなしに書かれた真実味のない事件の山、まるでありきたりな細部、個性も情味もなく、この上なく平板でいい加減で不正確な文体で書かれた代物である[75]。

辛辣で厳しい批評は珍しくないが、この批評には厳しさというより悪意を感じずにはいられない。まず「とかいう女性」という表現でヴィルヌーヴ夫人の無名を印象づけ、次に家政婦だったことをことさらに強調し、そんな家政婦でしかなかった夫人が「作家になろうとし」たと述べるところに、人を見下した冷笑的な態度がはっきり表れている。かりに筆者がヴィルヌーヴ夫人の出自を知っていたら、そのような書き方はしなかったのではないだろうか。そればかりか、『ヴァンセンヌの女庭師』が「話題にもならなかった」というのは完全な誤りであり、偽りでさえある。なぜなら、すでに述べたとおり、この小説は1753年の初版以降、18世紀だけでも、少なくとも８版を重ねており、発行地もパリだけでなく、ロンドン、フランクフルト、リエージュと各所にわたっている。さらに、前述のとおり、1807年にはアントワーヌ・ジャン＝バティスト・シモナンによって３幕のメロドラマ＝ヴォードヴィル[76]に翻案されて上演されているのであるから、「話題にもならなかった」はずはないのである。

有能な秘書

その一方で、全く異なる角度からヴィルヌーヴ夫人の様子を証言した人物もいた。女たらしの代名詞として知られるジャコモ・カザノヴァである。ヨーロッパを遍歴していたカザノヴァは、1750年に80歳のクレビヨンに出会っている。その手記によると、クレビヨンを訪問したカザノヴァは、自分がフランスに来た主たる目的は全力でフランス語を学ぶことであるが、自分のような注文の多い生徒に教えられるフランス語教師はどうしたら見つかるのかと尋ねたという。するとクレビヨンは自分もそんな生徒を探していたのだと言い、マレー地区にあった自宅に彼を招い

---

[75] Grimm, Diderot, Raynal, Meister et al., *Correspondance littéraire, philosophique et critique*, éd. Maurice Tourneux, Paris, Garnier Frères, 1877, t. II, p. 169.

[76] Antoine Jean-Baptiste Simonnin, *op.cit.*

た。そのようにしてカザノヴァは1750年から１年間、週３回クレビヨン邸でフランス語を学ぶことになる。そのカザノヴァがヴィルヌーヴ夫人について、非常に有能な家政婦としてクレビヨン宅の家政を取り仕切っていたと証言しているのである。

> 彼［クレビヨン］は年老いた家政婦を一人、料理女を一人、そして召使いを一人使っていた。その家政婦がじつによく気が利く人で、クレビヨンが何ひとつ困らないように配慮し、彼に金銭の報告をすることは決してなかった。〔…〕家政婦は届けられた原稿を彼に読み聞かせ、彼の検閲が必要だと思うと朗読を中断するのだった。だが時折ふたりの意見が食い違うことがあって、そんなときはふたりの論争が本当におかしかった。或る日わたしはその家政婦が「来週またお出でください。わたしたちにはまだあなたの原稿を点検する時間がないんです」と言って誰かを門前払いするのを聞いた[77]。

カザノヴァはこの10年後にフェルネーのヴォルテールを訪ねているが、クレビヨンに対してもヴォルテールに対しても、先入観や利害関係を持ったことは考えられない。しかもカザノヴァは、本稿で言及した同時代人の誰よりもヴィルヌーヴ夫人に直接、頻繁に会う機会を持ったのであるから、この証言は信頼に値するだろう。

＊

＊　＊

『美女と野獣』の原著者ヴィルヌーヴ夫人はなぜ忘れられたのかという最初の問いについて、以上の考察をもとにあらためて考えてみたい。ヴィルヌーヴ夫人がその著作に署名しなかったこと、妖精物語というジャンルの特殊性、そしてボーモン版の大成功という三つの要因についてははじめに述べたが、さらにヴィルヌーヴ夫人を不当に蔑み馬鹿にする人々が、その存在を消し去ることに影響したことが考えられる。その背景を辿ってゆくと、夫人が家政婦としてクレビヨン宅で暮らしていたことや、ヴォルテールがクレビヨンを敵視していたことに行き着く。ヴォルテー

---

[77] Jacques Casanova, *Mémoires*, Gallimard, « La Pléiade », 1958, t. I, p. 642.

ルの敵対心は、クレビヨンが『マホメット』の認可を２度拒んだことでいっそう燃え上がったが、それは彼が出入りしていたサロンの人々にも影響し、さらにヴィルヌーヴ夫人にも向けられたと考えられる。ヴォルテールはクレビヨンの悲劇を次々と書き直して意趣を晴らし、サロンの人々はヴィルヌーヴ夫人を蔑み物笑いの種にして面白がった。だがその間、ヴィルヌーヴ夫人とクレビヨンは何をしていたのだろうか？もともと書くことが嫌いで、人を非難するためにペンを用いることはけっしてなかったというクレビヨンは、ただヴィルヌーヴ夫人と蟄居して、みすぼらしい動物たちに囲まれながら仕事をしていたのである。

すでに見たように、実際のヴィルヌーヴ夫人は、第一級のエリート知識人を輩出した由緒正しい家柄の出である。作家としても、発表当初から読者を夢中にさせ[78]、その後何世紀にもわたり世界中の人々に語り継がれることになる『美女と野獣』を創作するという快挙を成し遂げている。しかしヴィルヌーヴ夫人は、その作者であることを人に知らせようとはしなかった。本稿で引用した同時代人の書簡を見れば明らかなように、彼らが夫人に結びつけるのはほとんど常に「家政婦」という肩書きであり、『美女と野獣』という書名は話題に上らない。ビアンカルディも指摘しているように[79]、『疥癬病みの狼』の話題で盛り上がっていたグラフィニ夫人もドゥヴォーも、ヴィルヌーヴ夫人の「家政婦」という身分にしか言及していない。しかしその３年前には、彼らは出版されたばかりの『美女と野獣』を何度も手紙で話題にしている。要するに彼らは『美女と野獣』の作者を知らなかったのである。彼らからみたヴィルヌーヴ夫人は、身分も財産も美貌もないのに下手な小説を書き、クレビヨンの検閲を手伝っている目障りな存在でしかなかったのだろう。

ヴィルヌーヴ夫人は、みずからが創出した『美女と野獣』の登場人物ベットのように[80]、自分のことは何も語らなかった。醜い老妖精の求婚を拒んだ王子は、老妖精

---

[78] 『アメリカ娘』の出版に際して『美女と野獣』が与えた反響の大きさについては、グラフィニ夫人とドゥヴォーの書簡が生き生きと伝えている。Madame de Graffigny, *Correspondance*, ed. par J.A. Dainard, Oxford, The Voltaire Foundation, 1992, t. Ⅲ, p. 125-127 Cf. Biancardi, *op.cit.*, p. 50-51.

[79] ドゥヴォーは1741年３月20日付の手紙のなかで、『美女と野獣』の作者をクレビヨンとする噂があることに言及している。*Ibid.*

[80] Gabrielle-Suzanne de Villeneuve, *La Belle et la Bête*, *éd. cit.*, p. 173-174.

によって醜い野獣に変身させられ、身分、肩書き、才気の使用を禁じられ、ただ真心だけを用いてベルの愛情を獲得するという難題を課せられる。それは地位や家柄に執着し、才気や美貌を最大限に活用して虚栄を求める社交界の人々のアンチテーゼでもあったのだろう。そんなベットの苦行を地で行くように、ヴィルヌーヴ夫人はアモス・バルボやジャン・バルボの輝かしい業績のことも、そして自分が『美女と野獣』の作者であることも知られようとはしなかった。馬鹿にされ、蔑まれても、貧しい家政婦としてクレビヨンの仕事を補佐し、ひそやかに執筆活動を続けたのである。

最後に、ヴィルヌーヴ夫人が知られることを望まなかった理由の一つとして、作者の名前が与える先入観への懸念があった可能性を指摘しておきたい。匿名が常態化していた17世紀末にこの問題を研究した学者アドリヤン・バイエによれば、この懸念は匿名の重要な動機の一つであった。「作者の名前はその著作に対する先入観としてはたらく。著者の人物像が著作の善し悪しを即座にきめてしまうからだ」というのである[81]。作家本人がこの問題について何も書き残していない以上、確かなことは言えないが、社交界の人々により揶揄され愚弄されたヴィルヌーヴ夫人にとって、自らの名前をその作品に結びつけるのはあまりにも分が悪く、意味のないことと思われたのではないだろうか。

---

[81] Adrien Baillet, *Jugemens des sçavans sur les principaux ouvrages des auteurs*, Paris, Antoine Dezallier, 1685-1686, t.1, p. 471. Cf. Mami FUJIWARA, « L'annonymat et la paternité de l'œuvre en 1713 », Geneviève Artigas-Menant et Carole Dornier dir., *Paris 1713 : L'Année des Illustres françaises*, Peeters, 2016, p. 295-307.